



JWU 子育てサイエンス・ラボが発行するニュースレター「ゆりのき」は子育てにまつわる様々なトピックやお気軽に参加できる「子育てサイエンス・カフェ」のご案内を掲載しています。以前の「ゆりのき」も[公式HP](#)で閲覧できます

=====**第11回子育てサイエンス・カフェ報告(1月18日実施)**=====

「共食について考えてみよう」

今回の子育てサイエンス・カフェは、「共食について考えてみよう」をテーマに、コロナ禍における食事スタイルの変容や「共食」の意義についてお話をさせていただきました。平日昼休みの30分という時間ではありましたが、お時間の許す参加者の方には、終了後に感想、質問等を挙げていただき、充実した議論を行うことができました。

「共食」とは「誰かと一緒に食事をする事」であり、一人で食べる「孤食」の対極にあります。共食といえば、家族全員で食卓を囲む「サザエさん」をイメージするかもしれませんが、それだけではなく、家族の一部のメンバーと食べる食事や、友人・知人と一緒にの食事も共食です。給食も、デイサービスでの一人暮らしの高齢者の食事も共食です。しかしコロナ前から、社員食堂では孤食者の増加に対応して、おひとり様スペースが増える傾向がありました。

では、「共食」にはどのようなメリットがあるのでしょうか。

文部科学省は「共食」

のメリットとして、①自分が健康だと感じる ②健康な食生活 ③規則正しい食生活 ④生活のリズム の4項目を挙げ、様々な研究結果を公開しています¹⁾。また、高齢者でも同居者がいるにも関わらず孤食の人は、共食の人に比べて男女ともにフレイルの出現リスクが約2倍高くなることも報告されています。給食を例にとっても、食事を通して会話が生まれ、単なる栄養管理のみに留まらない「食」の意義がありました。

しかしそれは2020年春を境として、コロナ対策として「黙食」が推奨され、給食時間も食器の音だけが響く沈黙の時間となりました。その黙食がついに昨年11月下旬に緩和さ

れました。背景として「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針変更」があり、「机を向かい合わせにしない」「大声の会話は控える」を原則として、地域の実情に応じた対応が可能となりました。

それでは、私たちは食事中の会話を楽しむことができるようになるのでしょうか。これに関して「令和3年度食育白書」に興味深い調査結果が報告されています。コロナ前の2019年には「地域等で共食したいと思う人」は43.3%、「実際に共食した人」は73.4%でした。それが2021年調査では「感染症防止対策が十分とられているという条件で、お答えください」という前提があっても、「共食したいと思う人」は36.7%で大きく変わらないものの、「共食した人」は42.7%とコロナ前の約60%まで低下していました。「対策を講じているから大丈夫」と言われても、私たちの日常になかなか受け入れられない事柄は多くあります。「共食は重要」と分かっている、どうしても躊躇してしまう。この3年近くの黙食は子どもたちに計り知れない影響は与えたでしょう。時間はかかっても、「安心できる共食」に向きあうことは、大人たちへの新たな課題ではないでしょうか。

1)

<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/evidence/attach/pdf/index-30.pdf>

(家政学部食物学科 松月弘恵)



====子育て関連 卒論紹介====

～ 子育てに関する卒業論文を児童文学研究のゼミから紹介します ～

(家政学部児童学科 教授 川端 有子)

古今東西の、といっても日本で翻訳受容されているものになりますが、川端ゼミでは児童文学の作品研究を行っています。作品論、作家論を目指す学生もいますが、「現代の児童文学に見る母娘関係」とか「現代日本児童文学における父の不在」、「ジャック・ウィルソンの作品に見る児童養護施設や里親家庭の子どもたちの抱える問題」など、複雑な家族問題や社会的養護を必要とする子どもの実情を、作品内に探るといった論文もあります。なかでも特に子育てに関する問題にアプローチした卒論に、「19世紀のイギリスにおける子育て事情—児童文学から見る」がありました。これを書いたAさんは、2年のフィールドワーク演習で大東文化大学のビアトリス・ポター博物館を見学したときから、ポターという絵本作家の人生に興味を持ち、とりわけ彼女が育ったイギリスのヴィクトリア朝の中流階級では、乳母が雇われて子育てに従事し、生みの親が関わるのが少なかったという点に大きな関心を抱きました。

そして、ポターを含め当時の作家の伝記や作品を資料に、ヴィクトリア朝イギリスの子育て事情を論文としてまとめるに至りました。ヴィクトリア朝の子育て事情は現代の日本から見るとかなり驚くことが多く、乳母による育児、朝から晩まで子どもたちが過ごすのは子ども部屋のみ、親とは食事すら共に取ることはない、などが特徴的です。だからといって親と子どもの間に愛情がなかったわけでは決してありません。ただ子育てには大勢の人が関わり、いままでいわゆる「ワンオペ」育児などという状況は絶対にありえなかったことがわかります。また、授乳に関してや夜泣きに対する処置、スウォッドリングと呼ばれる身体を拘束するような乳児服等、現在の常識からは考えられない「常識」がまかりとおっていたことから、Aさんは、現在の育児方法が絶対的なではなく、今後変化し、常識も変わっていく可能性があると考えました。

また、Bさんは1930～40年代に出版された「メアリー・ポピンズ」シリーズに着目しました。メアリー・ポピンズはいわゆるナニー（乳母）であり、4人の子どもがいるバンクス家に（非常に不思議な方法で）やってきて雇われます。物語の魅力は、一方では彼女の存在によって子どもたちがいざなわれる不思議な体験や奇妙な世界の楽しさですが、一方ではナニーが世話を担当する子ども部屋の日常生活が詳細に描かれており、Bさんは、特に子どもたちが食べているものに関心を抱きました。

ひとことでいうと彼らの食事は炭水化物過多でタンパク質不足、野菜にいたってはほぼ摂取していないという状況です。そこでヴィクトリア朝からエドワード朝にいたるイギリスの食生活について様々な文献を調べたBさんは、大人と子どもの食事内容が非常に違っていることに気づきました。そもそもイギリスでは階級によって食事のとり方も内容も差があるのですが、子どもの食事に関しては、階級差があまり存在せず、かなりの粗食で変化に乏しい単調なものであること、栄養に関する知識や常識が、現代とはずいぶん違っていたことなどを、この物語シリーズから抽出することができました。それだけではなく、男の子には積極的な食欲を許すも、女の子には食欲よりも精神的活動に多くを求めさせる傾向などのジェンダーギャップも読み取ることができました。

児童文学は、子どもの成長をテーマにすることが多く、様々な時代、様々な国の子どもたちの生活や環境について描かれているため、実体験だけではなかなか得ることのできない通史的視点や比較文化的視座を提供してくれます。子育てだけではなく、子どもをめぐる様々な問題や課題を考えるうえでも、豊富な手掛かりを提供してくれる領域であると考えています。



=====**次回の子育てサイエンス・カフェは！**=====



－ オンライン開催 － ご自宅からお気軽にご参加ください。

第12回子育てサイエンス・カフェ 「4、5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーション： 親の抑うつ、子どもの行動特性との関連」

講師： 人間社会学部心理学科 教授 塩崎 尚美

概要： 4, 5歳児の親子相互作用と家族コミュニケーションの観察を通して、その特徴を分析した結果を紹介します。
特に親の妊娠期からの抑うつと子どもの行動特性がどのような影響を及ぼすのかに焦点を当てた分析結果を紹介し、
親がどのようなことを心がけて子どもと関わるといいのかが考えてみたいと思います。

日時： 2023年3月18日(土) 10:30~12:00

▼申込み

申込： お申込受付後、返信メールにて Zoom 詳細をお送りします。

<https://forms.office.com/r/wXTv4M5xBR> または QR コードからお申込みください。



●参加費：無料 ●主催：日本女子大学社会連携教育センター

会員募集中!

～ 日本女子大学と「子育て」連携 しませんか ～
子育てサイエンス・ラボ協力会員募集中!!

JWU 子育てサイエンス・ラボでは、子育てや子どもの発達に関する研究調査等を行っています。

ラボ協力会員に登録して、お子様と一緒に、本学の研究に参加しませんか？

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、学外の会員様との研究、調査が開始できずにおりましたが、感染症対策を
講じながら、子どものことばや見る力の発達などの調査を本格開始いたしました。

おかげさまで、調査に参加くださる会員様のご来校が続いています！

「ラボ協力会員」詳細、また新たにご登録を検討いただける方は下のリンクにてご確認ください。

https://www.jwu.ac.jp/unv/campuslife/external/jwukosodatesciencelabo_top.html#00

(調査の内容・所要時間・謝金の有無等は都度担当者をご説明し、1回ごとに協力いただけるかどうかをお尋ねいたします。)



「JWU 子育てサイエンス・ラボ」を運営する社会連携教育センターの公式 SNS アカウントです。

